ブルジョアジーによる知識産業革命か　プロレタリア文化大革命か？

早大解体＝反大学運動を
どこまでもおしすすめよう！

1969. 6. 23

反大学運動早大事務局

〔１〕歴史的な２．７集会からすでに140日が経過した。曲折をへつつ、現在では殆どの学部が全面的なスト態勢に入っている。将子山管理体制にたいする、政府の教育政策にたいする造反の日のおさまりどころをしらず燃えひろがりつつある。この第２次早大斗争における程度、早大生等の学友がひろく、ふかく動員されたことはなかった。〈錯乱のバリケード〉の攻撃性と根源性は多様なかたちではあるが、四万学友の魂をゆるがしたのである。

しかし、斗う部分のどこからも、いったいわれわれが何に向かって、何を目的として斗っているのかの大方向が必ずしも明確に出されているわけではない。これでは、せっかく噴出した造反のエネルギーも適切な斗争形態をとることができず、斗いは持続することができない。

われわれは、政治斗争と学園斗争を機械的に分離したうえで、4.28やアスパックに何人連れ出せるかを以て学園斗争の質の指標とする各党派の政治主義に反対する。彼らは夫々の指導的認識から早大斗争を位置づけ、いわば利用しようとする。われわれは反対に、早大解体を含む社会全領域の解体の表現過程として4.28なり6.15なり或いは〈70年〉を位置づける。われわれの目標はしたがって〈早大を70年の拠点に〉することではなく、将子山管理体制を打倒し、早大を制度・機能のあらゆる側面に於て解体し、とりわけ国家権力と将子山管理体制によって収奪されたわれわれ自身の意識を、それらに管理されたわれわれの日常性を解体していくことである。われわれはそのための〈長い長い歩み〉として、反大学運動を提起する。われわれは、われわれ自身を、無階級社会に向かうこの運動の主体であると同時に対象であると見なすだろう。その過程で必要なあらゆることを ―〈70年〉も、プロレタリア権力の形成と解体も― 実践のなかでひきうけるだろう。

〔２〕われわれの当面の敵は将子山管理体制である。

将子山管理体制とはなにか？　第一次早大斗争後、阿部－高木体制の下で

必修単位数の著しい増大、出欠等による個人的・心理的・「文化的」自己抑圧（apathy 化としてあらわれる）と、「革命的」及び「民主的」な近代マルクス主義二派の自治会育成・操作による組織的・暴力的「自己」抑圧（学生自治会と学生の造反エネルギーを吸収・抑圧させる）の巧妙な二重支配体制が次々に形成された。昨年末の「革－民ファッショ体制」の確立は、この二重自己抑圧体系としての時子山管理体制の完成であり、破局のはじまりであった。

時子山管理体制は国家独占資本主義下における企業支配のひとつのモデルである。現在では、国家権力自体、直接的暴力による支配は従となり、マス・コミをつうじての、情報操作による支配を主とした情報暴力装置となりつつある（東大1/18-19があのような長時間の集団的拷問として演出されたのは、専らテレビを通じて権力が茶の間に警告するためであった）。とりわけ5人に一台と普及したテレビは家族を、さらに個々人の私生活を解体し、広告のイデオロギー化による消費生活の管理はさらに自己抑圧－自己搾取の外見をもった差人間的収奪をうみだして来ている。この時代には、個人がその生の差体性の名において国家を裁く地点から以外にどんな斗争も斗争とはなりえない。このことを理解しない戦後革新勢力 ―労組、日共、知識人ら「旧左翼」― はかけ値なしに国家独占資本主義の不可欠の支柱となっている。戦後民主主義とは、権力と戦後革新勢力による二重支配体制のことであった。

10・8にメットゲバ棒の「異形の者」として登場した学生・労働者の部隊は、この二重支配、この管理・消費社会に対する最初の社会的挑戦者となった。10・8のこの文化革命的質は日大・東大斗争にうけつがれ、自らの日常性の根拠を問う全国学園斗争へと展開した。これらの斗争の普遍性・根源性に対する攻撃として、大学立法等による管理体制のいっそうの構造的強化がはかられている。これはブルジョアジーの70年代反革命総路線たる脱工業

化社会への移行＝知識産業革命の戦略的一環である。

〈70年〉に焦点をあわせた政治主義・行動主義はどんなにラディカルであろうと（政治生活と市民社会の分離を前提にした政治主義は本質的にラディカルでありえないのだが）4.28　アスパック等に明瞭に見てとれるように、一片の〈情報〉と化して敵の構造にくみこまれるばかりである。われわれは全社会領域のブルジョア的枠の解体を、それを支えるわれわれの日常意識の解体を、プロレタリア文化大革命を提起しなければならない。

〔３〕反大学運動は大学を解体する。

大学解体が建造物の破壊や当局及び民青、革マルの物理的せん滅といった直接的斗争の次元に属するのでないことはいうまでもない。われわれのいう大学解体とは、ブルジョア社会において労働人民と切り離されつつ知的中間層＝知識－技術労働者を大量生産するところの大学存在の解体であり、なによりもそうした幻想上の聖別をうけた共同体に安住するわれわれの収奪された意識の解体である。大学という制度、そのコミュニケイション体系を超え、破壊し、权力にとってのぞましくないコミュニケイションを形成していく、大学という場から出発した日常生活批判の運動総体をわれわれは反大学運動とよぶことができる。

時子山管理体制解体はすでにはじまっている。〈錯乱のバリケード〉がこの二重支配体制に最初のクサビをうちこんだ。この敵のコミュニケイションの裂け目から、四万学友の想像力が、日常生活批判がじくじく展開しはじめた。現在おどろくべき勢いで一文、一政、教育を中心にひろまっている自主講座運動は、ひじょうに不十分とはいえ、すでにクラス解体、サークル解体の第一歩である。われわれはこれをどこまでもおしすすめなければならない。そのためには、「授業がないから代々木やる」という考え方を徹底してうちやぶり、教養主義、書物主義を徹底して批判し、この社会の中での自らの存在を問う方向

入たえず討論をおかわせる中で、われわれはオー次早大斗争とは違った地平から出発したのであって、もとのところへ帰ること（「正常」かつ快適な授業）が目的なのではなくどこまでも前進することが目的なのだということを不断に提起していかねばならない。またサークルは、斗争もやれば研究もやり続いは技術を追究する斗争委員会によって止揚されていかねばならず これを阻害するかたちで学館「自主管理」などが、既成サークルとなれあいつつおこなわれることを許してはならない。

ブルジョアジーの側は、彼らの70年代総路線である知識産業革命の三つの基礎条件として ①汎都市化現象（メガロポリス形成を含む）②マス・プロ教育による知的中間層の増大、③技術－知識労働者の身分保障制（特権化）による管理支配、を考えている（Daniel Bell－坂本二郎）。このために、現代的な時子山管理体制をひとつのモデルとしつつ、いっそう高度の国家的規模の大学管理体制をつくりあげていく一環として、大学治安立法は提起されている。大学という幻想共同体の旧来のぬくもりにあまえる「大学の自治」論からする立法反対はもちろん、70年治安対策としてのみ問題にする多くの党派の論理も、ブルジョアジーの側の総路線に対抗しえない。ただ自覚的な きわめて長期の展望をもった「錯乱」としての大学解体＝反大学運動の全国的展開のみが大学立法の意味の総体に対抗しうるのである。

〔４〕反大学運動は科学を解体する。

人類の認識はその発展の途上で、中世の神学のしもべとしての認識を解放するために科学という形態をもった。宗教－政治的国家のイデオロギーの擬似全体性（「隠性的な」）から身を衛るために、科学は、主体の主観領域を限定し、対象と一直的な関係を結ぶかぎりで認識は発展しうるという原理のもとに成立したのである（M.Weber のいう「断念」）。認識は分析的理性として確立することによって飛躍的に発展した。しかし、対象の全体性にとかうために対象の質を一面化しなければならない（経済学はその典型である）こ

とは大きな矛盾である。認識の発展はこの矛盾の止揚にかかわずにいない。科学という形式のもとでの認識の発展の結果として、反省的な認識の力が科学を解体し、新しい運動形態をもつことなしにはこれ以上発展しえないところまでわれわれは遠く来たのである。新しい運動形態とはなにか？　物的生産手段と全面的に分離し、どのことによって対象と弁証法的な全体性において関係しているプロレタリアートの実践の場に、認識の拠点をおきなおすことである。大学のもって来た一種の中立性・聖域性は、科学の一面性・抽象性の制度的表現だったのである。

国家独占資本主義のもとで、ブルジョアジーがすでに「知識人」を解体しつつ大量の技術－知識労働者を養成し、生産力としての認識を開発せざるをえなくなっていること（「産学協同」はこの抽象的表現である）は、まさしくこの科学の解体の客観的表現である。ブルジョアジーは盲目的にホワイト・カラーをプロレタリア化することによって、これまで自然成長性にまかせて来た科学を資本の論理の中へ組織し、本来プロレタリア政権が推行すべき精神労働と肉体労働の分裂の止揚の現実的条件を徐々にかたちづくりつつある。

われわれが資本制社会の解体を促進し、ブルジョアジーの巧妙な反革命戦略をうちやぶっていくには、市民社会・政治的国家・科学の分裂に意識的に挑戦し、階級斗争という環をつかむ中で生産的実践と研究的実践とを全面的に結合させるという課題に自覚的にとりくまねばならない。

大学解体＝反大学の初歩的形態としての、さまざまなレベルの「自主講座」批判講座、対抗講座は、こうした展望のもとで、斗争委員会方式による労働人民各階層とりわけ労働者階級との多様な結びつきの形成へ向かわねばならない。そして労働者農民が早大斗争に参加し、早大生がかれらの斗いに参加するという権力にとって好ましくないコミュニケイションの流れを形成する中で――それはさらに早大だけでなく全東京、全国大学と結合せねばなるまい――斗争に役立つ科学のみを発展させ（それは科学解体の第一歩である）、大学に生産点

に認識の拠点、革命をつかみ生産をうながし科学批判＝イデオロギー批判を展開するところの革命的行動委員会を築いてゆかねばならない。

〔５〕反大学運動は教育を解体する。

精神労働の自然成長性、そこにおける認識の細分化こそが教育という一面的・抽象的な社会関係としてあらわれていたのだとすれば、科学の解体は当然に教育の解体を意味する。資本の要請としてのマス・プロ教育は、精神労働の組織された全体性のために、情報伝達を個人の全体性にとってますます一面的なものとせねばならないという、大学教育の枠内では解決しえない矛盾をかかえこんでいる。われわれの大学解体＝反大学の総路線のみが、教育の人格からの分離に対応する大学の社会からの分離を打破し、日本全国をプロレタリア革命の大学校としていくというかたちで、この矛盾を解決しうるのである。教育という一面的関係性の崩壊の後に来る情報伝達の形態は、全面的対応性をもつところの〈自己教育〉である。

中大を頂点とする自主講座または谷川雁らの自立学校がその大きな意義にもかかわらずもっていた限界は ―いまさにML派が後を追っているように― 「プロレタリア私教育」を提起しつつ教育の解体にまでつき進めぬところにあった。職業革命家をつれてこようと、おわいやさんや港の労働者をつれてこようと、象徴的にせよ教壇が残存している限り、教育する者と教育される者の分離の止揚が意識的に追求されない限り、それはコップの中の嵐にすぎないのである。反大学運動は従ってその一形態として講演会を組織するにせよ、なにかちがった様式、すなわち、教えこむのでなくなにか回転装置を投げだし、聴く者観る者の自己教育を喚起するという演劇的スタイルの可能性を次々に探っていかざるをえない。学生（または教授・知識人）は、斗争の中で労働者と結びつくことによって肌にしみついた旧い教育・旧い科学を洗いおとし、〈大衆こそ真の先生である〉、そして私も大衆のひとりであるとしたら、すべての〝他者〟は先生である、という弁証法的な自己教育の思

想様式を次第に確立していかねばならない。

〔6〕 東大斗争は日本の官僚制の支柱となって来た東大の機能を告発する中で、〈自己否定〉の普遍的理念を提起した。これは、10・8羽田斗争のもった、この消費文明の中にぬくぬくと生きることはベトナム人民に対する「原罪」を構成するという告発の文化革命的質の必然的展開であった。しかし、自己否定とはなにをすることであろうか？自己否定のあとにはやはり自己否定しかないといって自らの実存について抽象的な思痴をいい続けることは最大の自己肯定でしかない。―― 否定すべき自己とは、〈生きた人間的諸個人〉としての自己の条件のこと、権力によって与えられたその生活領域のことである。具体的・発展的な自己否定とは、われわれが、学生としての規定をこえて社会各階層と結合し、国家権力の社会的基礎を破壊していく大学解体＝反大学運動でなければならない。

労働者階級は、ごくおおまかにいえば、労働組合―党―プロ独形成―プロ独解体といった一連の形態をもって労働力商品販売者としての自己のブルジョア的領域の歴史的解体＝階級形成をおこなう。〈知識人〉は、国家独占資本主義のもとではじめて全人間的に資本の論理にくみこまれ、その精神労働を組織的に、徹底して収奪されることの中で、プロレタリアートの歴史的階級形成に続々に参加しはじめている。これが東大斗争の提起した〈自己否定〉の意味である。それではこの自己否定＝階級形成はどのような構造をもっているか。

権力が労働人民の力量の外化＝表現であるとしたら、共同幻想としての国家権力は、差別としてあらわれる〈異物人〉への指示表出性なしに形成されえぬはずである。同様に、大学という共同幻想体が成り立つためには、大学へ入らない者に対する差別幻想が貫徹する必要がある（入試の根拠）。現実には政治的国家は、さまざまのレベルでの差別幻想によって（例えば"非人"を設定した太宰治から現在に至る日本の部落の存在）市民社会を管理するのである。〈市民社会はその胎内からたえずコダヤ人をうみだす〉（カール・マルク

ス）つまり〈ユダヤ人とはひとつの民族のことではない。それは資本にとっての"他人"なのだ〉（アーサー・ミラー）。「ユダヤ人」の解放なしに国家の解体はない。

日本にとってユダヤ人とは、部落、沖縄、朝鮮、中国（台湾を含む）のことであった。これらの存在こそ、近代資本主義が殆ど一直線に国家を媒介としつつ現在まで発展し来った、いわば搾取の思想的拠点であった。現在ブルジョアジーは〈知識人〉をプロレタリア化しつつ、幻想領域において特权化すなわち差別幻想を強化し組織するなかで、古来の、また近代化の過程から生み出された差別幻想を構造化し、普遍化することによって〈管理社会〉化の仕上げを急いでいる。〈知識人〉は精神労働者へと解体されているにもかかわらず、「管理者層」「身分保証制」などの新しい、いっそう歪曲な幻想によりひさつづき聖別されている。そこで、この新しい労働者の群れは自己のブルジョア性を克服するのに、その幻想上の特权を告発することからはじめねばならなかった（小ブル知識人だから自己否定、などというふるめかしい発想は全く誤りである）。しかしそれが自己の生活諸条件のブルジョア性の告発にすすむとき、〈自己否定〉は新しい、また旧い「ユダヤ人」諸階層——部落民、沖縄人民、在日朝鮮人、150万の義務教育長欠児童等——との具体的で多様な結びつきとして、さらにこれを軸とした、労働者階級、高校生予備校生等社会全領域との革命的結合としてあらわれて来ざるをえない。〈部落があるから、沖縄、朝鮮、中国があるから、テーダイがある〉、これが帝大解体の自己否定運動の構造でなければならない。

こうして反大学運動は、沖縄人民・在日朝鮮人民・在日華僑とすべての在日〈異邦人〉にたいする当面の悪質な攻撃としての出入国管理法案・外国人学校法案粉砕斗争に力をそそぎ、その中でこの諸階層との現実的な結合を追求する。われわれはこの斗争を、管理-消費文明の中で才能をもたず噴出している労働者階級の無形の力量にたいして、彼らがこれら「ユダヤ人」諸

階層のまえで自己否定の理念を（「自意識」として）つかみうるように、それにさってあらためて彼らの日常性の外に出て（責任が憎悪に形態を与える）いっそう全面的に自分の根拠と斗争しうるようになるための、もっとも主要で根本的な問題提起だと考える。反大学運動はこの斗争をばねにして、社会各階層と多様で革命的な結合を形成しうる。そのことにさってあらゆる差別幻想の解体と、差別を基礎とした現代文明、搾取された消費のテクノクラート社会の文化の総体の破壊へむかう、さまざまな行動要員間の違心的なウズへと〈革大全共斗〉を解体する。

〔７〕新しい根底的な変化とはマルクスの解明した資本の原理が成り立たなくなったところにあるのでは全然なく、逆に、われわれの意識と想像力の領域までが資本の原理にくみこまれつつあるところにあるのである。従ってイデオロギーと私的意識（政治生活と市民社会）の分離を無批判に自らの存在根拠とするすべての既成セクトはこの変化を解明しえず（解明すればその結論は自党派解体以外でありえないから）旧い階級斗争のコトバを語るばかりである。逆に想像力の私的意識からの自立性を信じようとするノンセクト・ラジカル及びナンセンス・ドジカル諸君はただ既成のマルクス主義の言葉を捨てることをもって何か新しいことをしているのだと思いこんでいる。

自己否定といい造反有理というも、管理といい差別というもこれすべて階級と階級斗争の問題である。絶対に階級斗争を忘れてはならない。階級と階級斗争の原理にもとづいて新しい情勢を真剣に、謙虚に研究しなければならない。

〔８〕反大学運動は当面、次の四つのレベルで共時的に追求することができる。

第一。全学に広汎にまきおこりつつある自主講座運動に、それがどんな水準であれすでにクラス・サークル解体の第一歩であって、それをどこまでも持続し発展させることは大学解体、科学解体、教育解体そして資本制社会

の解体を意味するものであることを提起し、じっさいにたえずその方向へ発展させること。

第二。「批判大学」或いはフリーダム・ユニオン方式の講演・討論を組織すること。一、二そして次の三のばあいもいえることであるが、固定したチューター・講師のふるいかたちでの安直な設定は、たちまち旧い教養主義（聴衆の没主体的参加）に犯される危険があるので、実践の中で次々に新しい ―― 例えば劇的な ―― 形態、スタイルをつくりあげてゆかなければならない。

第三。すでに一定の斗争を経験し、学館へ結集したり、各学部バリ内で斗っている斗争委員会の新しい内的結合としての研究会を組織すること。この目的は　a.経験を交流し活動上の技術を普及しつつ深めること（アジテーション講座、印刷講座、綜合ゲバルト・テクノロジー、ゲリラ化学など）b.破壊対象たる時子山管理体制と日本について、破壊のみを目的とした系統的で綿密な調査研究を組織すること（早大解体の破壊等・東京破壊等・革命地理学など）、c.ひとつの斗争委の中で小宇宙を形成しいじいじと党派の文献など学習するのをのりこえ、発展的に流動化させること　の三つである。

第四。現在、出入国管理法案粉砕早大実行委員会として形成されている新しい質の、在日朝鮮人その他の外国人との結合を志向する斗争委員会をひとつのモデルとしつつ、例えば労働者との結合のためにエ場へ行って調査もやれば斗争もやるという労働問題講座、砂川や三里塚へ行くなら基地問題講座といったかたちでの斗争委方式の反大学講座をつくっていくこと。これは現在すぐ創出可能な、もっとも水準の高い大学解体の形態である。

われわれはわれわれの「指図」に従う者を反大学運動と命名するような低俗な運動を全く考えていない。はじめにのべたように、早大四万学友の収奪された意識と想像力との弁証法に根拠をもった文化革命＝日常生活批判の総体をわれわれは反大学運動と考えており、その運動の促進に或る程度役立

ちうる情報センターとして、反大学運動早大事務局を位置づける。

すべての学友が、われわれのよびかけに行動をもって応ずることを希望する。

時子山管理体制解体！

造反有理！　奴隷主義打倒，己れの自閉性の根拠を問え！

カリキュラム重圧・出欠による心理的暴圧粉砕！

自治会解体！　「民主的」「革命的」近代マルクス主義粉砕！

知識産業革命か文化大革命か？　早大文化革命をさいごまでおしすすめよう！

大学治安立法粉砕！　すべての学生政治犯の即時釈放！

全国的な反大学運動の展開をもって"立法"にこたえよ！

細分化され非人間化した科学を解体せよ．生産点に認識の拠点を！
教育をして終焉せしめよ．全国をプロレタリア革命の大学校に！

出入国管理法案粉砕！　大村収容所廃絶！

アジア人民抑圧の上に築かれた繁栄を告発せよ！

アジア人民に敵対する安保体制打倒！

すべての差別幻想を告発せよ！　部落・沖縄・在日朝鮮人解放なしに帝大解体はない！

〔文責 [redacted]〕

反大学運動早大事務局
（才2学館10階）